

# lltjp-geometry.sty

LuaTeX-ja プロジェクト

2015 年 1 月 1 日

## 概要

ページレイアウトの設定として、`geometry` パッケージが有名であるが、これは pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X・LuaTeX-ja の縦組クラスでは利用が不可能という問題があった。本文書で解説する `lltjp-geometry.sty` は、`geometry` パッケージを縦組クラスでも利用可能にするためのパッチである。

## 1 利用方法

`lltjp-geometry.sty` は、LuaTeX-ja に標準で含まれている。本パッケージの動作には `ifluatex`, `filehook` パッケージが必要である。

### 1.1 LuaTeX-ja

LuaTeX-ja の縦組クラス、`lttarticle`, `lttbook`, `lttreport` では自動的に `lltjp-geometry.sty` が読み込まれる。ユーザは何もしなくても良い。

### 1.2 pTeX 系列

pTeX 系列では、`tarticle`, `tbook`, `treport` といった縦組クラスを使う場合にのみ、

```
\usepackage{lltjp-geometry}
```

```
\usepackage[...]{geometry}
```

のように `geometry` パッケージの前に読み込む。パッケージオプションは存在しない。

## 2 注意事項

### 2.1 twoside 指定時

`twoside` オプション指定時は、`left`, `lmargin` は小口側の余白、`right`, `rmargin` はノド側の余白を指す。縦組の本は通常右綴じであることを反映させたものである。その他にも、

- 左右余白比 `hmarginratio` の標準値は 3 : 2 に変更。
- `bindingoffset` は右側に余白を確保する。

表1 いくつかのフォント中の、文字の深さの最大値

フォント (10 pt)	深さ (pt 単位)
多くの横組用和文フォント (pTeX)	1.38855
多くの縦組用和文フォント (pTeX)	4.58221
Computer Modern Roman 10 pt	2.5
Computer Modern Sans Serif 10 pt	2.5
Times Roman (ptmr8t)	2.16492
Helvetica Bold Oblique (phvbo8t)	2.22491
Palatino (pplr8t)	2.75989

## 2.2 傍注

縦組の場合、傍注は本文の上下に配置される<sup>\*1</sup>。これにより、`includemp` (や `includeall`) が未指定の場合、傍注はヘッダやフッタに重なる。`includemp` 指定時は、`\footskip`、`\headsep` のいずれか (二段組の場合は両方) を `\marginparwidth + \marginparsep` だけ増加させる。

## 2.3 lines オプション指定時の `\maxdepth` 調整

L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X では、最後の行の深さ  $d$  と本文領域の上端から最後の行のベースラインまでの距離  $f$  に対し、

$$\text{\texttheight} = f + \max(0, d - \text{\maxdepth})$$

が成り立つ。

pTeX 系列の標準縦組クラス `[u]tarticle` 等、及びそれを LuaTeX-ja 用に移植した `ltjtarticle` 等では、`\topskip` は横組時における全角空白の高さ 7.77588 pt<sup>\*2</sup>であり、`\maxdepth` はその半分 3.88794 pt である。

いくつかのフォントについて、その中の文字の深さの最大値を見てみると表 1 のようになっている。欧文フォントのベースラインは、そのままでは和文との組み合わせが悪いので、さらに `tbaselineshift = 3.41666 pt` だけ下がることを考えると、最後の行に和文文字が来た場合はほぼ確実に深さが `\maxdepth` を超えてしまうことになる。従って、本文領域を「 $n$  行分」として指定するときによく使われる

$$\text{\texttheight} = \text{\topskip} + (n - 1)\text{\baselineskip} \quad (1)$$

は `tarticle` クラスのデフォルトでは通用しない。

通常の地の文のみの文章においてほぼ確実に (1) が成り立つようにするため、`lltjp-geometry.sty` では `lines` オプション指定時のみ `\maxdepth` の値が最低でも

公称ポイントサイズの半分に、欧文ベースラインのシフト量を加えた値<sup>\*3</sup>

になるようにしている。

<sup>\*1</sup> 二段組の場合は上下共に、一段組の場合は標準では下側だが、`reversemp` が指定されたときには上側に配置される。

<sup>\*2</sup> 標準の 10pt オプション指定時。以下同じ。ところで、この量は公称フォントサイズの 10 pt か、もしくは全角空白の高さと深さを合わせた値の 9.16446 pt の間違いではないか、と筆者は考えている。なお、奥村晴彦氏の pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> 新ドキュメントクラスでは公称ポイントサイズ 10 pt に設定されている。

<sup>\*3</sup> `tarticle` の場合だと、5 pt + 3.41666 pt = 8.41666 pt である。

## 2.4 lines オプション指定時の見かけ上の基本版面の位置

L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X では、本文の一行目のベースラインは、本文領域の「上端」から `\topskip` だけ「下がった」ところに来ることになっている。あまり `\topskip` が小さいと、ユーザが大きい文字サイズを指定した時に 1 行目のベースライン位置が狂う危険があるため、`geometry` パッケージでは

`lines` オプション指定時、`\topskip` の値を最低でも `\strutbox` の高さ ( $0.7\text{\baselineskip}$ ) まで引き上げる

という仕様になっている。

縦組の場合は、`\strutbox` に対応するボックスは `\tstrutbox` であるため、

`lines` オプション指定時、`\topskip` の値を最低でも `\tstrutbox` の高さ ( $\text{\baselineskip}/2$ ) まで引き上げる

という挙動にした。見かけ上は `\topskip` の値制限が緩くなったが、前節で述べたように欧文フォントのベースラインは和文に合うように下にずらされるので、実用上は問題は起きないだろう。

前節の `\maxdepth` の調整も考え合わせると、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X が認識する本文領域と、実際の見た目の基本版面の位置とは異なることに注意してほしい。

例えば A4 縦、公称フォントサイズ 10pt、行送り 18pt、30 行左右中央

```
\baselineskip=18pt
\usepackage{lltjp-geometry}
\usepackage[a4paper,hcentering,lines=30]{geometry}
```

と指定すると、以下のように設定される。

- `\topskip` は `\tstrutbox` の高さ 8.5pt に設定される。
- 本文領域の「高さ」 `\textheight` は

$$\text{\topskip} + (30 - 1)\text{\baselineskip} = 530.5 \text{ pt.}$$

- 従って、左余白と右余白は

$$\frac{210 \text{ mm} - \text{\textheight}}{2} = 33.50394 \text{ pt.}$$

しかし、実際にはページの最初の行のベースラインは、本文領域の右端から `\topskip` だけ左にずれたところであり、一方ページの最終行のベースラインは本文領域の左端にある。従って、**見た目**で言えば、右余白の方が `\topskip = 8.5 pt` だけ大きいということになってしまう。